

一の谷懐古（梁川星巖）

二十餘春夢一空

二十餘春夢一室 豪華吹散海風
山排殺氣參差出 潮迸冤聲日夜東
憶昔滿宮悲去鷓 欲將往事問飛鴻
爛斑剩見英雄血 塹樹鵑啼朶朶紅

豪華吹散 散不散 海嘯の風

解説 源平合戦の一つ、一の谷の古戦場に立つて、その戦いの跡を敗北した平家の側に立つて詠じた詩。

山は殺氣を排して 参差として 出で

語釈 ※一空||はかないこと。※豪華||平氏一門の繁栄をさす。※吹散||風が

潮は冤声を迸らせて 日夜 東す

吹き散らす。※殺氣||秋冬の寒気。※参差||物のふぞろいのさま。※冤声||恨みの声。※日夜東||東は平家が都した京。この京を慕って亡魂が昼夜、慟哭するようだ。※去鷓||安徳天皇が入水されたことをさす。※鴻||空の高い所を飛ばおとり。※将||そのことをもつて。※爛斑||美しいものの形容。※剩||あ

憶う 昔 満宮 去鷓を 悲しみ

ます。※塹:城塞の意。※朶朶||多くの枝々。

往事を 将つて 飛鴻に 問わんと 欲す

通釈 「平氏の栄華も、僅か二十年ほどで消え去り、一の谷に来てみれば、海か

爛斑 剩し 見る 英雄の 血

ら吹く風に、曾ての豪華さも吹き散じている。又、山は凄涼の気が漂い、波も飛沫をあげて荒れ、海底に眠る平氏の恨みを迸しらせ、京の都を恋うて流れているかのようである。仰げば、空高くに鴻が飛んで行く。あの鴻ならば、昔時の有様を知っているであろう。事の仔細を尋ねたい。ここで流された武士達の

塹樹 鵑 啼いて 朶々 紅なり

鮮血は、どれほど夥しいものであったであろうか。墨の樹木は杜鵑の吐いた血と見間違えるほどの赤い花が咲き戦いの凄さを忍ばせる。